

歴史サロン花畑 歴史講座「公文書が語る熊本の歴史」第6回

- 1 演題 書簡と公文書でたどる日露戦争
- 2 講師 木山 貴満 氏(熊本博物館学芸員)
- 3 日程 令和7年(2025年)3月25日(火)14:30~16:00
- 4 場所 桜の馬場城彩苑2階 多目的交流室

【講演録】

はじめに

公文書とは、文字のとおり^{おおやけ}公の文書です。「国及び独立行政法人等の諸活動や歴史的事実の記録」というのが、内閣府の中の規定であります。主に近代以降、行政など公的機関で作成保存した資料です。近世期江戸時代の文書、つい先日重要文化財の追加指定を受けた永青文庫なども公文書的な側面がありますが、公文書と私文書の境目が曖昧な部分が多くあって、やはりわかりやすいのは近代以降かと思います。現在の私自身も、熊本市の博物館学芸員として、公文書を日々作成しながら行政を進めているということになります。

次に、歴史的公文書。聞きなれない名称だと思いますが、公文書の中でも未来永劫残したほうがいだろうというものです。文書の重要性によって保存年限のレベルが分けられまして、将来にわたって歴史資料になると判断された公文書は、各地の公文書館や専門施設で保存管理され、一般の利用に供されます。これを見ると皆さんも、例えば熊本市であれば、熊本市政がどのように運営されてきたのかをチェックしたり、歴史的に検証することも可能になります。皆さんのためのものであり、私たちのためのものでもあるというものになります。

熊本県内の歴史的公文書は、熊本県立図書館に「熊本県公文類纂」があります。明治期を中心とした熊本県の近代行政文書で、非常に大変な量があります。明治10年の西南戦争関係の記録等もたくさん残っています。ちょうどこの3月まで、文学歴史館の方では、公文類纂の企画展示をされていました。熊本市立図書館にあるのは「熊本市政資料」ですね。熊本市ができた明治22年の市制当初からの資料が残っています。天草市立天草アーカイブスでは、天草市の地域資料を保存公開されていますし、熊本大学文書館では、熊本大学並びに熊本に関する学術資料を管理公開されています。

熊本市の公文書館は、令和9年度末、2028年に植木の方で開館予定ということで、すでに新聞報道等もあっております。熊本市の行政文書を見る施設がついにできるということになります。ちなみに、熊本市の歴史文書資料室は、『新熊本市史』編纂時に収集された資料を中心に、いろんな歴史的公文書の複写版が利用可能な施設です。とっても便利なところです。市役所の隣のビルで手軽に見ることができるので、我々もとても重宝しております。今回の公文書資料も、歴史文書資料室で閲覧して作ったものになります。

公文書に対しまして私文書、私^{しぶんしよ わたくし}の文書ですね。これは広範に、公文書以外の個人や会社が作成した資料のことになります。ただ、私が扱うようないわゆる古文書^{こぶんしよ}(古文書と言われるときもあるが、一般的には古文書^{こもんしよ})という言葉自体は、過去の時代に書かれた資料全般を指し、公文書・私文書問わずに扱います。通常我々が歴史研究をするときは、特に公文書・私文書という使い分けをせず歴史資料として扱うことが多いです。

言うまでもなく、歴史研究はこの古文書、過去の記録を素材として研究を行って、歴史的事実を明らかにすることを目指すもので、実際どうだったのかを考える学問になります。ですが今回はタイ

トルにもありますとおり、意識的に公文書と私文書、熊本市の行政文書と個人の書簡に注目して、両資料から窺うことのできる日露戦争の一側面に焦点を当て、資料活用の意義について考えてみたいと思います。

日露戦争と熊本(第六師団)

教科書的に日露戦争を振り返ってみましょう。明治 27 年の日清戦争後、日本は朝鮮半島、清国へ進出します。これにより日本はロシアと接する形になりまして、直接対立が不可避になります。昨年度の歴史文書資料室の講座で、井手三郎という熊本出身のジャーナリストについてお話をしました。彼や熊本済々黷出身の方たちが大陸に渡って、いろんな世論形成活動をしていました。その根底には、日本が明治10年代から清国に進出していくにあたって、ロシアを恐れるべきか恐れざるべきかという議論があったんですね。ロシアは常に、幕末の頃からずっと、仮想敵であったわけです。それがいよいよ対立不可避という状況になり、日本は軍拡に努めます。陸軍師団増設、有名な軍艦三笠の建造など、その規模は日清戦争開始前をはるかに上回る軍備増強となりました。

そんな中、明治 33 年(1900 年)に扶清滅洋(清を助け外洋(外国)を滅ぼす)をスローガンに掲げた義和団が清国に起こりました。「北京の 55 日」という義和団事件を描いた映画もありました。外国がどんどん清国の中に進出してくるのに対して、清国はどんどん弱腰になってしまって止められないというときに、義和団が蜂起して排外運動を実行したのがいわゆる義和団事件、義和団事変、北清事変と呼ばれるものです。義和団は当初は義和拳といまして、武器を使わずにカンフーで戦う反乱軍だったんですね。宗教色もありました。

清の西太后は義和団の鎮圧に失敗して追い詰められますが、逆に義和団に乗って、英仏以下ハカ国に宣戦布告をします。日本・ロシア諸外国の連合軍は清国に進軍し、総攻撃の末、8 月に北京を鎮定します。以前の教科書に載っていたハカ国連合の兵士がずらっと並んで、一番左側にイギリス・アメリカの大きい兵隊が、一番右端に一番小さい日本が写っている写真はこのときのものです。

清国は 4 億 5 千万^{テール}両という国家予算何年分もの莫大な賠償金を支払うことで、講話を受け入れることになります。そして清国の軍事的な弱体化が明らかになったことで、満州地域へのロシアによる進出姿勢が露骨なものになるんですね。これは日本からすると皮肉な結果で、日清戦争で日本が清に勝ったことにより、眠れる獅子として畏れられていた清国に外国が出てくるようになります。つまり結局のところ、ロシアとの対決のきっかけを作ってしまったのは日本だったんですね。

明治 35 年、日本はイギリスと日英同盟を締結します。これはロシアとフランスが結んだ露仏同盟に対抗して、何かあったときはイギリスも入ってきますよと相互に牽制し合う同盟です。この日米同盟を結んだということは、^{イコール} = ロシアと直接対決が日本国内で決定的なものになった、ということの意味しています。

実際このとき、本等でもなかなか出てきにくいですが、日本国内ではロシアとの対決をやるんだということで国内が非常に盛り上がっています。戦争への機運が高まっていってしまうんですね。このとき熊本では 11 月に明治天皇を迎えて、陸軍特別大演習を実施しています。ちょうど今皆さんが花見を楽しんでいる行幸坂、行幸橋なども陸軍特別大演習の時に作られたものです。

明治 36 年、鎮圧したのだから兵を引きましょうという約束に違って、ロシアは満州からの撤兵をしませんでした。兵を置いたまま、さらには鴨緑江(中国と北朝鮮の国境付近を流れる川)の河口

に軍事基地建設の動きを見せます。このロシアの動きに対して、対露強行論がどんどん高揚していきまして、さらに外交交渉が不首尾に終わったことで、即時出兵に向けた開戦準備が進みます。明治 37 年 2 月、旅順付近での戦闘をきっかけに日露両国は戦争状態に突入します。

第一軍は東京の近衛師団や小倉の第十二師団などが仁川や遼東半島から奉天を目指し、第二軍は東京・大阪・名古屋からの師団、熊本の第六師団も属し、遼東半島から北進するという作戦です。レジュメ資料編の最初に「日露戦争時の第六師団進軍図」を載せていますので、それも見ただけだと思います。

第六師団は首三堡(遼陽の南に位置)、奉天会戦などに中核兵団として投入されます。日露戦争に 6 万 2000 人余りの兵力を派遣しまして、遼陽会戦では 3000 人を超える死傷者を出しました。明治 38 年 3 月の大会戦で、日本は奉天を一気に押さえます。ただこのときロシアは戦力に余裕を残しての撤退だった一方、日本は物資・兵力ともに枯渇。特に現場を指揮する将校たちの損耗が激しく、指揮を執れる人がほとんどおらず、日本はぎりぎりの状況でした。

この奉天では決着がつかなかったので、戦場は日本海に移ります。日本海海戦でロシアの艦隊を打ち破ったことで日本の優位が固まり、ロシアが講和に応じます。アメリカのルーズベルト大統領の斡旋で、アメリカのポーツマスで講和条約に調印となり、日露戦争が終わりました。明治 37 年・38 年の 2 カ年に渡りますので、明治三十七八年戦役とも呼ばれます。第六師団は明治 39 年 3 月に、全部隊が熊本に帰還して復員を果たしました。

1. 熊本市政資料に見る、日露戦争と熊本市

公文書「熊本市政資料」から見ると、このとき熊本市はどんな状態だったのか。公文書を使った先行研究が『熊本市政 70 年史』にありまして、これは 1964 年に熊本市の行政職にある大先輩方が、市政資料をたくさん使って市政を振り返っています。

これによりますと、当時の熊本市は陸軍特別大演習の当地で、その受け入れ準備に奔走しています。市長は辛島格。辛島町という町がありますが、そこはもともと陸軍の土地があったのを、この辛島市長の代に移転させ、新しい町、新市街を作りました。その功績で辛島町、辛島公園に名前を残しているんですね。辛島市長は、大演習挙行済みの仙台へ出張に行って準備をしたり、受け入れのために祇園橋を架けたりもしています。架橋の費用は 1 万円。生成AIの参考では現在の 3800 万円ぐらいだそうです。当時の物価で何を指標にするかによって価値が変わってきますから、そのあたりの計算は難しいですね。どちらにしても結構な金額です。行幸坂の桜についても「大演習を記念した御幸坂の桜の植樹が、今日に至るまで市民の憩いの道として親しまれている」と書かれています。

続いて『熊本市政 70 年史』本文から、明治 37 年 2 月の日露戦争開戦のときには、

「辛島市長は全般を督励し動員事務の整備、充員招集後の家族保護、軍隊送迎、傷病兵慰問などの準備計画に日もない有様だった」

とあります。戦争になると、市長も大変忙しいと。

「2 月の市在住者召者は将校、下士以下 248 名は市内の各民家へ宿営があり、さらに 5 月の大動員で市民から 310 名が応召となった。12 月には市民の応召は 672 名、戦死者 32 名、戦病死 6 名となった。」

これは明治 37 年です。熊本市からもたくさんの兵が出ていて、戦病死者もいると。

「これまでに本市で戦争献金を申出た人員が 382 名、金額にして 4,895 円 34 銭 7 厘」
献金も結構な金額ですね。先ほどの費用も数千円ぐらいは市民からの献金で、日露戦争を支える熊本市の支えるお金になっていると。

明治 38 年の段階で熊本市で受けた動員は合計 48 回に及び、特設部隊の編制に伴う兵舎設置は多忙を極めました。これを行うのは熊本市であったんですね。仮兵舎は全市に渡っていて、熊本は当時軍都と言われますけれども、兵士がそれこそ町中に溢れて、出発を今か今かと待っているような状況がありました。「意気天をつく」郷土部隊、混成部隊が入舎し、滞在し、出発していき、「銃後を守る市当局の事務も寸暇さえ無い繁忙さ」でした。

そうやって送り出した 8 月になって、京都からの第十六師団が出発完了してひと段落もなく、今度は凱旋する部隊の受け入れが始まりました。市内の兵舎にきた凱旋部隊は 52 個、2 万 429 人、市内の召集された兵員が 1088 人になりました。

「郷土の凱旋部隊を迎えるため、市の玄関口祇園橋には凱旋門が立てられ、晴れの帰還のコースである熊本駅から細工町、唐人町、明十橋、船場町には銃後を守った市民の心からなる花のトンネルが設けられた」

その時の様子は日露戦争の写真アルバム「明治三十七・三十八年戦役記念写真帖」（熊本城頭彰会寄託）でも見ることができます。明治 37 年 6 月 7 日、第六師団の出征壮行会が現在の白川公園のところで開かれている様子。凱旋軍隊を迎え入れた後の招魂祭。招魂祭は戦前の熊本では最大のお祭りと言われています。細工町入口の凱旋門に大国旗、家々にも国旗が揚げられている様子。凱旋兵士はその中を通過して町の中心部へ戻っていったのでしょう。駅前の凱旋門の左側には「明治三十七・八年戦役凱旋軍歓迎門」、右側には「鹿児島熊本宮崎沖縄県民連合建設」の文字があります。鹿児島・熊本・宮崎・沖縄の 4 県合同でこの凱旋門を立てたということです。日露戦争に出征した兵士は 108 万人もの数になりますので、実は各町村で凱旋門を作ったところは多かったようです。御船ではそれが地名としてバス停の名前で残っていたり、県北の方はまだ凱旋門自体が残ってるところもあったと聞いています。

では「熊本市政資料」の整理番号 777「凱旋軍隊歓迎一件書類」を見てみましょう。これは永年保存の書類で、今も保管されているものです。明治 38 年 10 月に熊本市の庶務係が作成し、全 76 号案件が記載されています。レジュメ資料編の ★《資料 I》「凱旋軍隊歓迎一件書類」 をご覧ください。

1 号案件 (一) にまず協議事項が載ってまして、

「凱旋軍隊一般歓迎準備整頓前ニ帰来スル小部隊ノ歓迎ハ差寄り左ノ振合ヲ以テ執行スルコト」

歓迎準備ができる前に帰ってくる小部隊があるんですが、「差寄り」は熊本弁で差し当たってってことですね。

「市トシテハ凱旋ノ際春日停車場付近ニ於テ毎回五発宛ノ煙火ヲ打上ケ、又凱旋軍人ノ数ニ応シ一人ニ付約一合宛ノ割ヲ以テ其軍隊ニ酒若干樽ヲ寄贈スルコト」

春日停車場は熊本駅のこと。煙火は花火というか煙が出てパンパンと音が鳴るものです。



「凱旋軍隊歓迎一件書類」表紙

「尚武会トシテハ音楽隊ヲ春日停車場ニ出シ春日上熊本ノニ停車場及細工五丁目出外レニ
大国旗ヲ掲クルコト」

尚武会についてはレジュメ 6 ページの注 2 に説明があります。

「軍隊通過ノ道筋ハ軒頭ニ国旗ヲ掲ケ、夜間ハ点灯セシムルコト」

「軍隊到着ノ際ハ各市ノ公職ニアルモノ及尚武会委員ハ各町内ヲ勧誘シテ可成多数春日停車場
付近ニ出迎ヲ為スコト」

市の行政として、市民皆で出ていってお出迎えしようということが、ここで決められたと。

「市トシテ寄贈スル酒及煙火代ハ一時尚武会ヨリ借入レ置キ、準備成ルノ暁ヲ以テ戻入ルハコト」

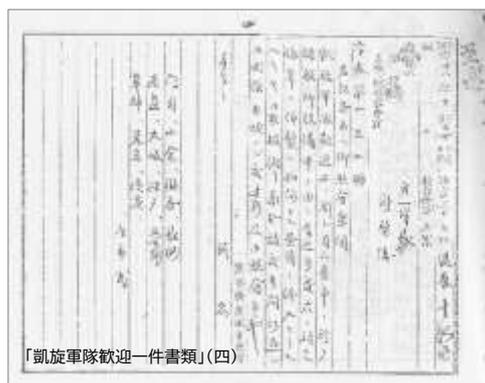
「凱旋歓迎ニ関スル寄附募集ハ現金ニ限ラス相当ノ制限ニ依リ物品ニテ寄附スルモ差支ナキ
コトハシ、其集リタル物品ヲ便宜ナル一定ノ場所ニ収集シ、福引ノ方法ニ依リ凱旋ノ下士以下ニ
寄贈スルコト」

「但寄附ノ振合ハ市民貧富ノ程度ニ応シ鑑定員ヲ設ケ、具鑑定ニ拠ラシムルコト」

いろいろ集めておいて、復員してきた人には、福引でそれを差し上げること、ただ寄付の割合は市民貧富の程度に応じて、鑑定員を設けてつぶさに鑑定によらしめることということが決められています。これが差し当たって市で決めた協議事項になります。

2号案件(二)は、書類冒頭の枠を再現してみました。こういう形で書かれています。明治 38 年 10 月 24 日に浄書主任で書記の後藤がこれを書いて、校合立案は空欄、第一課長から助役と市長に上がってそれぞれ判子を押している。課長から市長の間がなく直行というのは、今の行政文書からするとすごくシンプルで、当時はまだ市の組織もコンパクトだったんだろうと思います。

4号案件(四)の資料は、他都市への紹介です。凱旋軍隊の出迎えについて予算費目はどう処理してるのか、熊本同様陸軍師団を市内に抱える他都市に照会をかけています。ここで市で働く人間からすると面白いと思ったのが、発番を据えて他都市に質問をして、他都市からきちんと回答が返ってきているところ。なぜなら今も全く同じなんです。この4番案件には「至急」という肩書きがあって、「市庶第一三二号」市の庶務課の 132 号の発番をとって、「左記各市へ御照会案伺」の件名で発出しています。



「凱旋軍隊歓迎上ニ関シ、目下貴市ニ於テ諸般
御設備中ノ由ニ有之候處、右ニ対スル予算ノ編
製ハ如何ナル費目ニ編入セラルベキヤ、御取扱
振り承知致度候間、折返し御回報相煩ハシ度、
此段及御照会候也」

送り先は門司、小倉、福岡、長崎、広島、大坂、神戸、

名古屋、京都、東京、横浜。今であればメールや担当部局間で電話で問い合わせているかもしれませんが、このときは郵送ですね。

問合せを受けて、一番近い長崎市役所から順に返答が来ています。

「貴市庶第一三二号ヲ以テ凱旋軍隊歓迎上ニ関スル予算編製費目編入云々御照会ニ候處、
本市ニ於テハ未ダ其設備無之候条」

うちではまだやっていませんという返事。次の福岡市は、

「本市ニ於テハ役所費中交際費ヨリ三千三百円支出スル事ニ市会ノ決議ヲ経テ、実施致居候間、右様御了知相成度」

役所費の交際費から。広島市役所になりますと、軍都ですから組織が整ってるんですね。

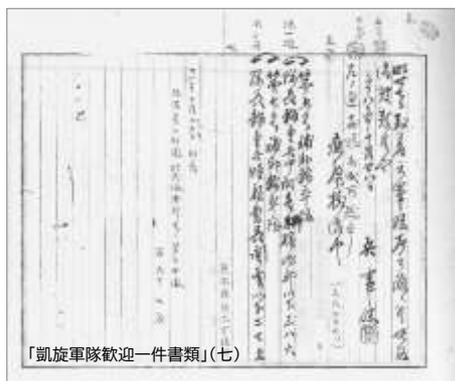
「凱旋軍隊～、本市ニ於テハ軍人待遇会ナルモノアリテ、之ニ歓迎ニ要スル費用ヲ補助シ、同会ニ於テ歓迎会ヲ為ス義ニテ予算ノ編製ハ軍人待遇会ヘ補助費トシテ取扱ヒ候」

広島は軍人待遇会という団体にお金を出すことで、歓迎費用の費目としています。また東京は「市役所費(款) 交際費(項)ノ費目ニ依リ整理」とあり、各都市でそれぞれ工夫して費目を設定していました。他都市からの回答は市長以下重役で回覧をしていて、このようなことに悩みながら熊本市がお金の準備をしていたことがわかります。

5号案件(五)に続きます。(一)の協議事項で煙火を上げると決められていましたけれども、

「軍隊凱旋ノ際、春日停車場付近ニ於テ毎回五発宛ノ煙火打上ノ事ニ関シテハ監督者無之付而ハ不都合ニ可有之存セラレ候ニ付」

打ち上げるときに誰か監督する人がいないとダメでしょうということで、「御迷惑ナガラ貴殿ニ於テ時間其他錯誤ヲ生セサル様煙火受持委員トシ」以下見えないんですけども、凱旋軍隊準備委員の甲斐一郎という方に煙火打ち上げ委員を依頼しています。こういうたくさんの決め事があって、その記録が市の公文書として残っているということになります。



7号案件(七)は、(一)で凱旋兵士に酒を寄贈するといった件です。実際どのように行われていたか。「昨^{にじゅうしち}廿七日到着之軍隊、左之通ニ候、此段御報致候也」と書類を作ったのは兵事係の倉永。庶務係、高尾酒店というところからお酒を出してもらって、第五号補助輸卒隊、第七号補助輸卒隊または輸卒隊の人たちにそれを贈って、第六師団第七水上勤務補助輸卒隊の隊員・田路九郎から清酒を受け取りましたという受領証が来ているというものです。

「今般以御陰無事凱旋相出来、深く奉感謝候、特に昨日は御丁重なる御進物を賜はり早速部下一同に分配して御芳志に浴せしめ候、先は不取敢乍略儀以書中部下一同に代り厚く御礼申上候、匆々敬具」

さらに輸卒隊隊長、関勇という方からも御礼の言葉を市に出していると。お酒の受領の一例でしたが、このような記録が残っているから、熊本市がこの出迎えに際してどのような組織的な対応をしていたのか、どのように日露戦争と関係したのかが詳らかになるんですね。

凱旋軍隊の出迎えはここにあるとおり、市業務として広範な準備作業を伴うものです。しかも今はこの出迎えのところだけを切り取っていますが、その前から兵舎の建設や、遡れば明治35年の陸軍特別大演習の時からずっと様々にやっているわけで、これは市にとって非常に大変な業務だっただろうと予想されます。

この日露戦争当時の熊本市政、実際の公文書に注目することで、国家／戦争と地方自治体・地方公共団体、大分今と性格は違いますが、その関係性が浮き彫りになります。

2 博物館への寄贈資料 ～ある日露戦争出征兵士書簡との出会い

私文書でたどってみるとどうなるのか。レジュメ3ページになりまして、がらっと変わります。「吉住繁象・西園寺琴寿関係資料」というのが、令和4年6月に熊本博物館へと寄贈されました。全80点、第六師団騎兵第六連隊に所属した吉住繁象より、西園寺琴寿（私立尚綱高等女学校卒業）宛ての書簡が中核となる資料群です。この宛先になっている琴寿の西園寺家は、中世以来、砥川神社（上益城郡益城町砥川）の社司を務める名家です。近世期は砥川村庄屋を務めており、村方資料については熊本大学付属図書館に所蔵されています。

通常と同じく、この資料の受け入れ後に整理を進めていた途中で、この資料の特質に気がきます。当時、繁象・琴寿の2人は交際関係にありました。当時としては珍しい恋愛関係です。騎兵隊下士官と地元名士の娘の恋愛というのは、想像のとおり家格上の困難を伴いました。さらに吉住繁象が日露戦争に従軍したことで、距離的にも時間的にも、両者を隔てるものが大きくなって…というものです。

本来歴史研究において資料とは、冷静に読み解く、気持ちを込めずに書いてあることを淡々と分析すべき対象なのですが、本資料に関しては整理中から様々な想像をかき立てられました。私自身、日露戦争の出征兵士が地元の恋人に宛てた手紙なんて初めて見ましたから、まず驚いたというのがありました。今回は私文書として、個人の感情が生々しく綴られたこの手紙を取り上げて、日露戦争の一側面に迫ってみたいと思います。

吉住繁象は騎兵隊第六連隊に所属していました。騎兵隊は明治30年大江村の新兵営に移転していますので、出征前は大江村の新兵営におられたのだらうと思います。西園寺琴寿は明治36年に私立尚綱高等女学校を卒業します。明治31年当時はおそらく17歳。当時の尚綱高等女学校は昇町3番地、今の安政町付近にありました。2人がどうやって知り合ったのか、出会いはわかりませんが、資料としては日露戦争に出征したところから話が始まります。レジュメ資料編に手紙全文の文字起こしと文意を用意しましたのでご覧ください。

出征

★《資料2》（年月日欠）

「差し急ぎ一筆申し上げます。待ちに待った動員命令も、本日午後一時に……一旦出発したならば、素より生還は望んでいません。お別れの言葉として一筆差し上げておきますので……」

宛先は音だけ拾って「乙寿」と書いてありますが、正しい字は琴に樹で「おとしゅ」です。この手紙には日月が書いてありませんが、内容からして出征前とみて間違いなだらうと思います。

★《資料3》（年月日欠）

「ますますの御多祥をお慶びします。動員命令以来、一日千秋の思いをして……熊本停車場を出発して長崎に向かい、それから船の輸送でいよいよ遠征の途に就く……必ず勇ましい戦報なども私が生きている限り申し上げます……」

他の資料で見ても、出征兵士は長崎に行って船で輸送されるというコースです。もとより生還を望んでいないと宣言して、私が生きてる限りは手紙をあげますよと。文字どおり決死の覚悟ですね。これが本心なのかどうかはわかりませんが、文面自体もすごく勇ましく書いています。

★《資料4》（明治37年カ）4月19日

「春とはいっても野原の匂いも身に染まず……我が騎兵四名が勇戦して敵騎兵三十名と衝突

し、偵察任務をよく務めた夜などは、血が躍り肉振るうような感激がありました。……私たちはどんな不運なのか、いまだこの栄えある機会に参加することが出来ず、実に残念至極……」

開戦から早数か月、前線配置がまだ命じられてなくて残念だ、早く実戦に臨みたいという文言が書かれています。《資料 2・3》に引き続き、戦争に向かう勇ましさを強調した内容です。

★《資料5》(明治 37 年カ)6 月 24 日

「前略、上陸以来前進、また前進と続き、戦闘を交えることすでに二回となりましたが、……昨日の戦闘で小隊長と兵卒一名が、コサック騎兵の攻撃により銃傷者を生じてしまいました。こうした事は戦地にいる我々よりも、新聞号外などによほど詳しく載っているのではないのでしょうか。……間もなく大規模な戦闘に参加できるだろうと指折り数えて待っているところです……」

コサック騎兵との実戦をすでに 2 回経験した後ですね。熊岳城は旅順よりちょっと上のあたり。繁象自身に怪我がないのもあってか、戦闘に行くぞ、やるぞという内容です。

葛藤

★《資料6》(明治 37 年カ)7 月 10 日

「その後、彼の地に滞在すること二週間余りで前進を始め、昨日九日からようやく蓋平への総攻撃に移りました。……その追跡の帰り道、彼等(ロシア兵)が駐留していたと見られる場所に、ロバ、牛、馬の蹄・骨が散乱して悪臭が立ち込め、……血に塗れた襦袢や、まだ生血が乾いていない繃帯、布当てが撒き散らされ、本当に惨憺たる戦闘後の光景を呈していました。……とにかく故郷からの手紙は戦陣中の慰めとなりますので、お暇のときはお手紙をお送りください。……「灯台下暗し」で少しも分かりません。」

蓋平は熊岳城のちょっと上。彼の地というのは熊岳城のあたりに留まっていたということだと思います。日本軍が蓋平の攻撃では確かにスムーズに占領するんですけども、繁象はロシア兵が撤退した後に、戦場ならではのいろいろなもの、惨憺たる戦闘後の光景を目の当たりにするわけです。《資料 5》までの手紙に比べると好戦的な文言が激減して、追伸では故郷からの手紙は慰めになる、暇なときは便りをくださいと依頼しています。

また、繁象ら現場の兵士たちが、戦況について「灯台もと暗し」と実感していたことも注意が必要です。目の前の戦闘しかわからない、逆に国内からわかっていることがあったらお知らせくださいと手紙に書いているのは、従軍兵士の体験として興味深いところです。

★《資料7》(明治 37 年カ)7 月 19 日

「酷暑の季節ですが、……先だってお送りした数通の手紙はお手元に届いたでしょうか?伺いたく思います。……」

《資料6》の手紙と連続したもので、琴寿からの手紙を心待ちにしている様子が窺えます。戦況・戦闘・戦場に関する文言はほぼ皆無で、とにかく手紙を送りたい、手紙が欲しいという気持ちが見えるものになるかと思います。

★《資料8》(明治 37 年カ)8 月 20 日

「頼るものも少ない可哀そうなあなたが……悲哀の底に沈むあなたはさぞや辛かろう、さぞや苦しかろうという思いは異国に身を置き、生死の間にあっても私の胸から消えることはない。……時節の到来を待って、楽しく暖かい月日を迎えることを神に祈るしかない。……再びつなぐことが出来ない悲哀なる境遇に陥ったりしたら、そのときはこれがお互いの運命だとあきらめ、生涯

独身を押し通すのみだ。……」

繁象書簡の決定的変化、ターニングポイントとなる手紙だと思います。蓋平の戦いから1ヶ月後、琴寿の身に何か明らかに良くないことが起こったことが読み取れると思います。繁象宛ての手紙に、琴寿が自身の悲哀の情を書いて知らせたのでしょうか。文面からすると2人の交際がばれたのか、何か非難されるようなことになってしまったのか。これに対して繁象は、これまでは候文の勇ましい内容を並べていましたが、言文一致体、話し言葉と同じ文体で琴寿の気持ちに寄り添おうとしています。琴寿を心配し、復員後のふたりの生活を楽しみに待とうと呼びかける一方、交際が断ち切れることになったら生涯独身押し通すのみだとも書いていまして、これまでの手紙とは内容も心情も明らかにがらっと変わっています。

★《資料9》(明治37年9月初旬カ)

「初秋の候ですが、……今回、世界未曾有の遼陽総攻撃に参加することができ、……戦闘の正面は二十里余りにもわたり、我々はその最前線にあって敵と交える鋒先は寝ても休みません。……第一先鋒として夜襲を試みましたが、敵の鉄条網にかかり、横隊陣形のまま枕を並べて斃れ、生き残った者たちも皆負傷して、辛うじて生命だけを保ち退却するなど……戦友の負傷も顧みないで、雨あられと降り注ぐ敵軍の銃弾のなかを突き進み、敵堡壘を乗っ取ったとき、生存者は総数の四分の一ほどに減り、屍の山、血の小川とはこのことかとばかり……」

《資料8》の手紙から間もない時期だと思います。琴寿に寄り添った手紙を書いていた繁象ですが、実は命の危険が迫っていたんですね。蓋平の戦闘後、繁象は大石燈、營口、海城、牛莊の各実戦に参加し、遼陽総攻撃の最前線に配置されていました。この手紙ではその激戦を知らせていて、ロシア軍の堅固な堡壘に、日本軍の死傷者が多数にのぼった様子がうかがえます。繁象の大観としては、損耗率は四分の三。このときの繁象は、恋人も心配だし、自分も騎兵第六連隊の一員として最前線を駆けずり回って、すごく大変なタイミングだったんだと思います。遼陽会戦の後は奉天まで進軍し、陸軍の戦いとしてはひと段落になります。

復員

★《資料10》(明治38年)1月14日

「平和第一の新春を迎えてから……以前繁忙を極めた高等司令部から、部隊付きとなったことで一層安楽を感じています。ほとんど毎日無事退屈に苦しんでいます。……凱旋の日程まで早くも一ヶ月余りとなりました。あなたもお身体を大切に、(私の帰りを)お待ちください」

遼陽の総攻撃を生き抜いて、満州で迎える2年めです。高等司令部から部隊に戻ったことで、ちょっと退屈してるというような状況です。凱旋まで1ヶ月あまり。繁象の帰還をと書いていませんが、心情的には、私の帰りをお待ちくださいねと結んでいるのではないかと思います。

★《資料11》(明治38年)2月15日

決定的書簡2通目です。繁象が琴寿の決心と覚悟を問うていますが、この文面はもう文学作品に近いような、名文であるように感じました。折角ですから、原文から。

「寒月澄み渡る蒙古の境に在って……自分は此手紙を認むるに付けても、身を切らるゝ想がして、乙寿さんの御両親様や兄上様に対して、うしろめたくて気が咎め、非常に良心の制裁を受けて、実に何共言へぬ苦痛を感じるのです。……此後愈々理想を実行するとしても第一が世間体でしょう、以前から吾等二人は汚れた交情で有った事ハ世間に知れ渡って、大概の人は一度位

の後指ハ指したに相違あるまい、それが引ひて、御父上様や兄上様の御名誉を毀損した訳けであるから、一ツには御家柄に対し、一ツには世間に対し、快く互の願を容れて下さるか奈何か、是は一ツの疑問で有る。……どうかすると、御父上様や兄上様のこわいお顔に睨まれて「吉住貴様ハ何処までも厚顔の凶々しい奴だな」とお叱りの声を聞く事が度々あるのです。其お顔を見、其お声を聞くと、如何にも罪を犯せし人が法律の網を遁かれて、巡査や探偵にでも、行き逢った様に、理と非の別ちも無く、争ふ勇氣もなく、恐怖と、驚愕とにて打倒れて了う様な心地かするのです……乙寿さん、あなたの御決心次第で、此吉住繁象の運命ハ定まるのですから、どうか十二分の御覚悟と決心とを此悲境に沈める僕に迄知らして下さい。」

この最後にわざわざ行を変えて、「頼むよ」と書いているんですね。

繁象は2月26日に鉄嶺(遼寧省鉄嶺市)を発車しまして、熊本に3月10日前後に到着しました。無事復員を果たした繁象には、従軍記章なども授与されます。繁象・琴寿の2人は結ばれて、幸せなご家庭を築かれたと伺っております。

おわりに

私的な文書だからこそ見えてくる歴史的事実や様相というものは、やっぱりあるんですね。今回の資料では、戦場という生死を掛けた極限状況にある中で、吉住繁象は熊本に残した恋人に手紙で懸命に寄り添いました。これは紛うことなき人間性の発露であると同時に、一個人が生々しく感情を書き付けた私文書だからこそ看取できるものでもあったと思います。

レジュメに「観念的恋愛≠実践的恋愛」と書いていますが、明治20年代頃から西洋的な恋愛論というものが語られるようになりました。恋愛とは精神性の交流だとか、さまざまに解説をされるのですけれども、この手紙を見ているとそんな生易しいものではないなど。特に繁象・琴寿の場合は家柄や出征という大きな障害があったにも関わらず、この手紙に見るとおり、頑張って生き抜いて幸せな家庭にたどり着きました。歴史研究では公文書などで組織体、社会としての歴史に迫りつつも、その根底にある一つ一つの私の営みには常に注意をすることが肝要だといいますが、それを改めて認識させられた資料でした。

今回は書簡と公文書でたどる日常戦争でお話させていただきました。熊本市の行政文書から見る日露戦争、個人書簡から見る出征兵士の人生ドラマのように、さまざまなレベルの資料を博捜することで、歴史を立体的に捉えたり、歴史の奥行きを把握することが可能になります。公文書・私文書は歴史研究において、両輪欠くべからざるものというふうに、私は捉える次第です。少しでも皆さんの印象に残る部分があれば幸いです。

(文責:熊本市歴史文書資料室)